

コロナ危機の世界史的位置

小野塚 知二（東京大学大学院経済学研究科教授）

わたしは「危機」という語を使うことには控え目です。

「危機」という言葉のさまざまな使われ方に多少の違和感を覚えるからです。たとえば、目立ちたがる者は好んでこの言葉を口にします。話題性としての「危機」です。それは濫用すれば、「狼が来た」を連発した少年のように、効果が薄れるばかりか不信の原因にすらなるでしょう。ただの話題提供なら他愛ないのですが、「危機」が「改革」の課題と抱き合わせて連呼されるとき、政治的・経済的な権力者たちは、「負担」や「痛み」を民衆に分け持たせようとしています。話題性は押し付けとしての「危機」に容易に転化するのです。また、現状には本質的な不安定性や本来的不完全性が潜んでいると考える者は、それが顕現する瞬間を期待して「危機」を語ります。ここでは、危機の発生とは、現状をそのよう

に解釈する理論や信仰の正しさの証明でもありません。

いずれの場合も「危機」という言葉は安売りされ、「万年危機論（everlasting crisis theory）」に陥りがちです。とはいえ、今般の新型コロナ・ウイルスによる疫病（COVID-19）の蔓延は、やはり危機といわざるをえないと考えています。なぜ、それが危機なのかを、歴史研究者として述べてみましょう。この疫病禍が危機であるとするなら、それはいかなる意味において危機なのか、その基準をあらためて考えてみたいのです。

診断者の側の要因と非科学性

普通の風邪の咳や頭痛など、わずかな症状でも病と認定し治療しようとする医師にとって、「健やかな状態」の基準は非常に高く、わずかな症状も健やかさか

らの逸脱として危険視されます。逆に、多少の症状を観察しても、それまでの経緯と全体的な状況から「大した病気ではありません」と診断する医師にとつて、期待された健やかな状態の基準はそれほど厳格ではなく、滅多なことでは病気だと大騒ぎしない傾向があります。社会、経済、政治、文化は、いつも一定の健やかな状態を維持し続けているわけではありません。そこには常に何らかの症状が観察されるでしょう。その症状を深刻に診断するか、楽観的に診るのかの間に潜む差は、症状それ自体にはありませんし、また単に診断技術の差に由来するわけでもなく、診断する者の思想や価値観の差が大きく作用しています。つまり、診断者の側にも「危機」の決定要因はあるのです。

しかし、今わたしたちが経験しているのは、診断思想の相違といった高尚なことではなく、事実立脚した科学性の根本的欠如という醜態です。五輪を控えていたからか、感染症対策の中核に座る者たちに固より隠蔽体質があったのか、それとももっと根深い戦前以来の体質が潜んでいたのかは今後の検証を俟つべきことです。が、感染という事実を真剣に調べずに、「緊急事態」を弄び、「今後二週間が峠路」と叫び、「明るい兆

明瞭ではありません。その第一の理由は記録の残り方にあります。人類はおそらくこれまでに何度も終末を経験してきたのですが、その内在的な記録は残りなく、外的な観察や伝聞ばかりが残りがちです。たとえば、古代シュメール文明やイースター島の巨石文明は終末の記録を自ら残していないし、弾圧され焼き尽くされた異端や「魔女」たちの例も同様でしょう。近現代の二百年間に消滅した少数言語社会も自らの終末の記録を残した例は稀です。

終末が明瞭でない第二の理由は、いかなる意味でも終末とみなしうる事例がそもそもほとんどないからです。たとえば、第一次世界大戦の勃発も、1930年代の大恐慌も確かに危機的なできごとでしたが、それによって何が終末を迎えたのかは必ずしも明瞭ではありません。第一次世界大戦中および直後に、ローマ帝国の末裔たる4つの帝国(ロシア帝国、ドイツ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、オスマン帝国)が崩壊しています。しかし、それはその地域の人々と生活が完全に滅亡したことを意味しないばかりか、新たな社会の始点ともなっています。第一次世界大戦前に構築されていた高度に相互依存的な第一のグローバル経済は、

しも見えてきた」といった情緒的な願望で対処しようとするのは、日中戦争から対英米開戦に盲進した際の日本の非科学性の粗悪な再現を見る思いがします。

五輪延期が決まって二ヶ月経ても、人口千人当たりPCR検査数が18人とOECD平均23.1人の10分の1に満たない悲惨な状況が継続し、検査を受けられず斃れ行く方が後を絶ちません。そこには保健所の整理縮小や独特の検査態勢への固執など個別的な要因が作用しているとはいえ、その底に見えるのは、一般の戦争指導者たちが敵の勢力を偵察も分析もせず、戦の勇ましい掛け声を発し続けたあの忌まわしい非科学性です。一度は反省したはずの非科学性の再現ということだけでも、今回の疫病は十分に危機です。

危機の時間感覚

診断者側の要因のほかに、危機の発現する時間感覚(間隔)の差も危機認識に大きく影響します。時間感覚の差とは、1回限りの終末的破局(Catastrophe)なのか、循環的・周期的な変化の中の一コマ(とその繰り返し)を通じた変化(を危機とみるかの違い)です。

ここで、終末的破局とはいかなる事態なのかは実は確かに大戦の勃発によって分断され、それは現在まで完全には回復せず、1990年代以降の第二のグローバル経済は何らかの不均衡を内包する仕方ではか実現していません。第一次世界大戦は、円滑かつ円満な第一のグローバル経済に破局的終末をもたらさずはしましたが、それで世界の経済活動が停止したわけではない、資本主義・市場経済・産業社会が根本的に立ち行かなくなったわけでもありません。通俗的な終末思想が夢想するような破局はなかなか顕現しないのです。

逆に、循環的・周期的に揺れを繰り返して気付いた別の世界に転じていたという危機は、一見、非歴史的な気楽な物語のようにも映りますが、それは必ずしも安穏な過程とはいえません。繰り返される揺れの過程で蓄積される摩滅や喪失は、人びとの生と社会関係と価値観に不可逆的な変化をもたらすし、正義感や勤労意欲を着実に衰滅させるからです。また、振動が発散して構造そのものを破壊する事態(工学的にはフラッターやパフエッティングなど発散振動に起因する構造破壊)も想定できます。かつてマルクス主義の一部に見られた「恐慌から内乱、革命へ」という危機待望論は、経済・社会・政治の発散振動によって資本主義の

強固なシステムが壊滅することを夢見る発想でした。

1930年代大恐慌との比較は適切か

今般の疫病が何かの終末を意味するのか、それとも周期的な振動の発散局面を示しているのかについては、いまいし時間をかけて見きわめるべき問題でしょう。わたしは、それは現代(ほぼ20世紀に相当する時代)あるいは近現代(産業革命以降の、ほぼ19〜20世紀に相当する時代)に強引に終焉を迫るべきことではないかと考えていますが、それは最後に触れましょう。

評論家やエコノミストの中には1930年代の大恐慌以来の経済的危機だと言う方々が少なくありませんが、わたしはそれは三重の意味で誤りだと思えます。第一に、大恐慌は第一次世界大戦後の世界経済の歪みを直接的な原因とする文字通り経済的危機でしたが、今般の疫病は1990年代以降の経済の歪みを直接的な原因とはしていません。グローバル化や供給連鎖の世界的拡大が疫病蔓延の背景であったとはいえ、それは原因論とは異なる問題です。第二に、大恐慌の殊に初期過程には、金本位制に由来する古い金融・貨幣秩序への配慮が作用して機敏で積極的な財政出動を抑制

しましたが、今回は疫病以前から、主要国の金融は「異次元緩和」の局面に突入しており、財政出動への制約はありません。今ありうる分岐は、どこにどのような仕方で出動することが、最も求められているのかということに対する想像力・創造力の多寡です。移動や経済活動に権力的な制約を加えるが、金銭的な補償によって民衆の生存を維持する責任を示すのか、それとも、自由や権利を制限する権力のあからさまな行使は躊躇して、「自粛要請」と同調圧力で民衆にじわじわと齧寄せをするだけで、実のある補償には一向に踏み込もうとしない無責任に逃げ込むのかの相違が財政出動のあり方を大きく左右しています。第三に、証券価格や原油先物価格の急落は一部の投資家にとっては危難でしょうが、そうした市場の破調は疫病以前から予想されていたことでした。ほとんどの人びとにとって今回の問題は、移動と活動の制約によって生存の基盤が損なわれ、かろうじて築いてきた人間関係が壊れてしまうという生の実質合理性の危機の方にあるのです。

「スペイン風邪」との比較：生命の費用の高騰

大恐慌に比べるなら、百年前の「スペイン風邪」との

比較の方がはるかに有意義だと考えます。いずれも人間の大量移動によつて瞬く間に世界に蔓延した疫病であり、その原因を安易に他国のせいにする言説が跋扈している点も似ています。しかし、そこには無視できない相違もあります。

第一に「スペイン風邪」の経済的損失は、第一次世界大戦の損失に埋没してしまつて可視化されなかつただけでなく、アジア諸国人民の被つた災厄も、大戦と大戦後の動乱(たとえば三一運動や五四運動)の陰に隠されて、当時はほとんど注目されませんでした。

第二に百年前は民衆の生命の政治的・社会的費用は欧米先進国においても驚くほど安かつたのに対して、いまは民衆の生命の費用は政治指導者をたじろがせるほどの水準に達しています。オバマ・ケアを破壊してしまつたアメリカ合衆国は国民の保健医療の脆弱性という点で他の先進国とは異なる特殊な社会ですが、二度の大戦や朝鮮戦争で大量の戦死者を出したあと、ヴェトナムやイラクの経験で、兵士の生命の費用はじわじわと高騰しました。ソ連は革命・内戦、スターリン肅正、大祖国戦争において民衆の生命の政治的費用は驚くほど安かつたのに、スターリン後の諸改革とア

フガン戦争を経て、人がゆえなく死ぬことは、「革命遂行」や「祖国防衛」という一般論としてではなく、個別的な説明と補償を要することとなりました。中国は世界最大の人口がむしろ経済にとつて死重であるような社会で、内戦から文化大革命、中越戦争での大量死を経験しましたが、いまでは疫病への初動対応にも指導者の責任が問われるほどに、人の命は重くなっています。

こうした「戦争大国」に比べるなら、第二次世界大戦後大きな戦争を経験していないヨーロッパや日本で、また、苦難の後に経済発展と民主化を経験した韓国や台湾において、いち早く民衆の生命の社会的・政治的費用が上昇したことはいうまでもありません。そこで問われているのは生命の費用の高騰に対応して「指導者」や「専門家」が適切な選択と決定と説明をしているかどうかです。いや、誰でも新たな事態に直面すれば誤りはありうるということを認めるのなら、適切に選択・決定・説明する努力と、適切な方向に改める努力とを怠っていないかが重要です。この努力を怠り、生命が安かつた時代の無責任さに安住することが、今般の疫病の政治的・社会的危機の本質です。

代替策・後継者の有無

ひとりの人の生物としての機能が滅びようとしている状態に接して、残されて今後も生き続けなければならぬ者たちは、その者の生死のみに心を奪われるわけにはきません。死に行く者の果たしてきた役割を代わり果たす者がすでに用意されているのなら、去り行く者への哀惜はあっても、世代交代の定めと甘受することもできません。ところが、後継者の見付からぬままに死の床にある者を診るのはまったく別の問題です。生命と機能を維持することが可能な状態なのか、そうではなく、否応なく死滅が早晚訪れる状態なのかによっても「危機感」の程度と質はまったく異なるものにならざるをえないでしょう。

実は第一次世界大戦や大恐慌という破局が必ずしも終末を意味しなかったのは、経済・社会の組織化という代替措置や延命手段が、しばしば暴力的な仕方ではあつたにせよ、利用可能であつたからにはかなりましです。第一次大戦期の組織化は当初から計画された事態ではなく、多分に泥縄的な過程でしたが、それでも、高度に相互依存的な世界経済が引き裂かれた後に、イ

ギリスとドイツは相互に相手を経済的に窒息させ、飢えさせる戦いを足かけ5年間も闘いうる程に、組織化は効果的に機能しました。では、現在、こうした代替措置や延命手段の利用可能性はどれほどあるのでしょうか。危機は、代わりうるものの有無という点でも論じられなければならないでしょう。

時代の転換期と次代の構想の欠如

14世紀の「黒死病」は世界各地で大幅な人口減少をもたらした。その副産物として前近代(中世)の規範・思想・秩序は揺らぎ、際限のない欲望の主体として人間を承認しようという新しい時代(近世)前近代から近現代への長い移行期)に道を拓きました。ヨーロッパ史のルネサンス、宗教改革、「地理上の発見」が次代の構想を次々と示したのですが、同様の変化は日本や中国にも観察されます(小野塚『経済史』有斐閣・2018年・第Ⅲ部参照)。

近代はすでに19世紀末には自助の困難性の発見から行き詰まりを見せていましたが、それを終わらせたのは、直接的には、自助「古典的自由主義の次代を構想していた社会主義者たちではなく、第一次世界大戦

と戦争末期、戦後の「革命の恐怖」でした。社会主義が唱えてきた国際連帯による世界平和という理想を掠め取る形で国際連盟が結成され、それは1920年代にはかろうじて戦争放棄と集団安全保障の夢を追求しました。また、社会主義と労働運動が要求してきた8時間労働や労働者保護のための国際基準は、ヴェルサイユ条約に盛り込まれてILOという形で、予防革命的に実現します。そうして否応なく登場した現代(20世紀)は、過剰な革命と予防革命とによって決して薔薇色の時代ではなかったとはいえ、多くの先進国では近代の社会主義と国際労働運動が唱えてきた理想を代替的に実現し、また、民族独立、人権・自由・民主主義、豊かさといった夢を生きた人民にとって次代への期待であつたことは間違いないでしょう。

この現代も1970年頃から、介入的自由主義への忌避感、過剰人口、そして温暖化問題によって頓挫しつつありますが、次代の構想がなかったために退場できずに延命してきました。いま、その現代は疫病禍によって強引に終焉を迫られています。ただし、そこにあるのは、個人の行動を逐一追跡・監視して、健康と生命のためだったら死んでもよいといわんばかりの

「生政治(bio-politique)」の急速な増長という次代です。「安寧な生」は保証される代わりに、人権・自由といった近代を貫いた価値はほとんど形骸化してしまいう危険すら感じます。東アジア型のコロナ対策の相対的な「成功例」とは実は、宮崎駿の漫画『風の谷のナウシカ』がすでに1990年代には予感し、伊藤計劃『ハーモニー』(2008年)や安藤馨『統治と功利』(2007年)がよりリアルに予想して見せた即時管理・監視社会を指し示しています。疫病禍を奇貨として権力的で人為的な「調和と安寧」が意外なほど早く実現するのではないかと想像するのはわたしだけではないでしょう。幸か不幸か日本はその方向への変化という点でも出遅れています。日本が20世紀前半に経験したのと同様な「自粛」と無言の同調圧力、身近な他者への抑圧移譲に留まっているのは、外国の「先進事例」と比べるなら牧歌的といっても過言ではありません。

19世紀末〜20世紀初頭に社会主義、国際労働運動、民族独立の夢を追求した者たちの多くは百年前の「スペイン風邪」を経験していますが、彼らがいまの世界を見たら、何を思い、何を主張し、どのように行動するかを想像する力が歴史学に求められています。